2. 防空監視哨



「勝浦町防空監視哨」
昭和 18 年（1942）頃、覚翁寺裏山で撮影。防空監視哨とは、全国の市町村に設置された敵航空機を見張る施設で、警察署の指揮下、民間隊員により運営されました。情報は都内の軍指揮所に集約され、迎撃や空襲警報の発令に活用されていました。
3 列目の右から 5 人目が数金さん、７人目が一つ上で仲の良かった大野貞夫さん(本写真保管者：故人)、2 列目の警察官の左に座っている人は隊長格の人で浜勝浦から毎日監視哨に来ていたとのことでした。
提供（展示賞状共）：大野賢一 様

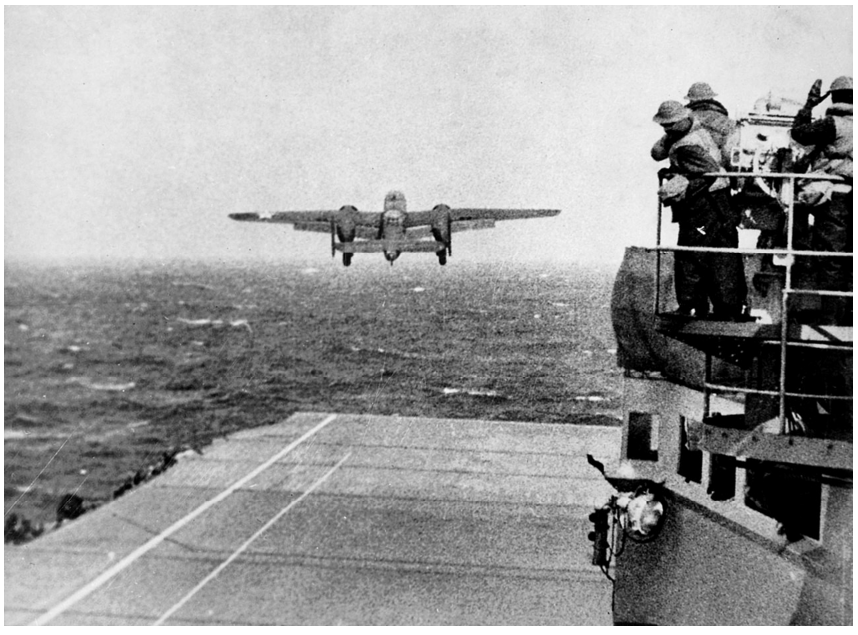


防空監視本部員の集合写真(左)
前列中央男性向かって左側は、写真保管者で勝浦町在郷軍人会会長の榊田庄七氏(故人)。現在の商工会付近に有った警察署に近い別荘を借り上げ、主に若い女性が電話手として勤務していました。当時、ここに勤務していた方によれば、こちらも電話手に採用されれば、工場等への徴用を避けられると言われていたそうです。
提供：榊田道貴　様



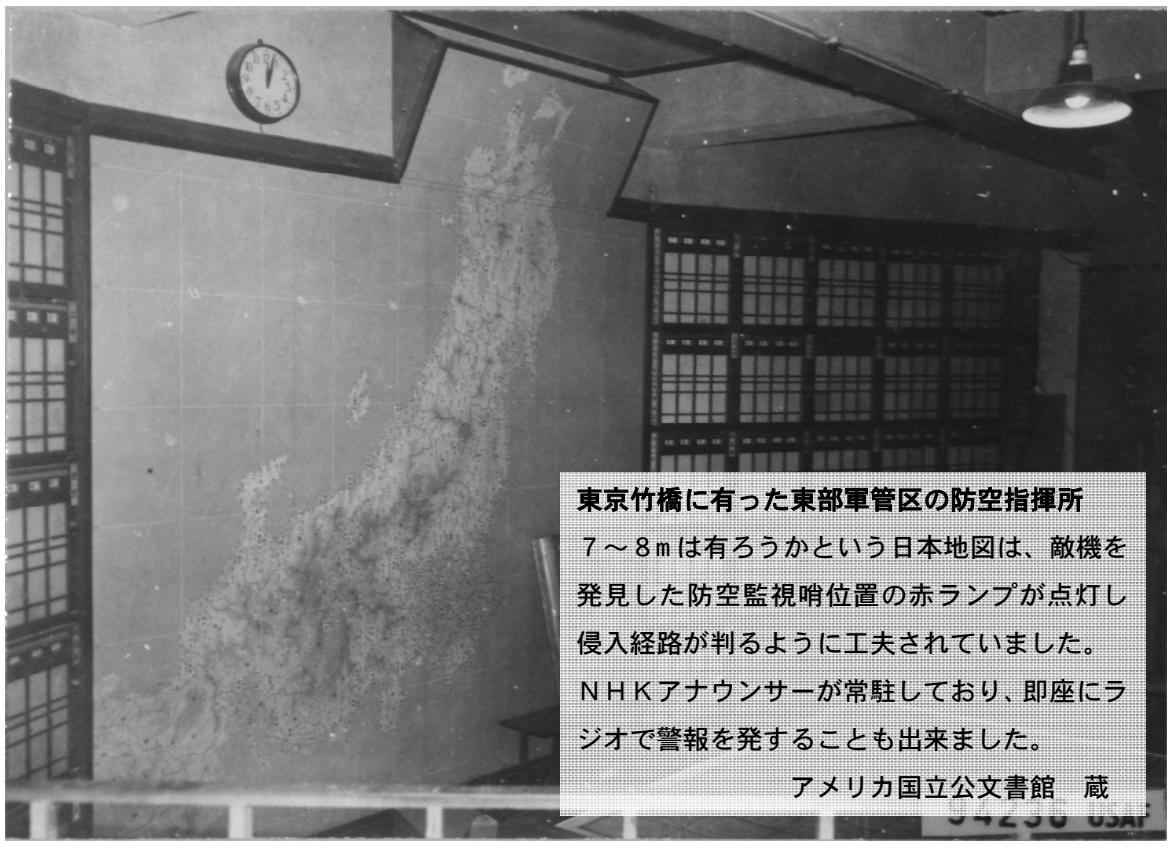
覚翁寺裏山から撮影した戦前の勝浦。監視哨の櫓からは航空機の他にも、沖の船舶や官軍塚のレーダー基地まで見渡せました。

昭和１７年半ば、共に働いていた従弟が船員として国に徴用され金生丸はお父さんと２人運行になってしまいました。数金さん自身もいつ徴用されるか判りません。そうした中、防空監視哨員は徴用されないらしいと聞いた数金さんは早速志願し、無事採用されました。勝浦町防空監視哨の勤務は８時から翌朝８時までの２４時間勤務。１班８名程度で、班長となる成人男性と、青年学校に通う未成年男子等で構成された５班編成で５日毎に当番日となりました。



昭和 17 年 4 月 18 日、空母ホーネットを発進した 16 機の米軍爆撃機は単機ごとバラバラに日本本土に侵入し全機が中国大陸に脱出しました。

アメリカ国立公文書館　蔵



東京竹橋に有った東部軍管区の防空指揮所

７～８ｍは有ろうかという日本地図は、敵機を発見した防空監視哨位置の赤ランプが点灯し侵入経路が判るように工夫されていました。

ＮＨＫアナウンサーが常駐しており、即座にラジオで警報を発することも出来ました。

アメリカ国立公文書館　蔵



昭和 14 年頃に撮影された豊浜青年学校の学生と指導者

青年学校とは小学校等に設けられた、義務教育を終えてすぐに就業した社会人向けに一般教養や軍事教練を学ばせる制度で、地域の教員や在郷軍人が指導にあたりました。後に、これらの学生が防空監視哨の主力となっていきました。

旧豊浜小学校　蔵



「写真週報 19 号」に掲載された漁村道場

本施設は、全国に先駆け串浜春日台に設置された県立水産学校で寄宿を原則としましたが、数金さんのように通学生もいたようです。

また、勝浦警察署近くに設けられた防空本部には、電話手として若い女性が多く勤務し、夷隅郡内の各監視哨の情報を集約していました。

櫓での監視任務は２人１組、１時間交代で小型の双眼鏡を用います。櫓中段の窓ガラスで囲まれた部屋には、机や警察署直通の壁掛け式電話が備え付けられ、「○時○分、約 800 トンの貨物船、何マイル沖を東に向かう」などの報告を行いました。櫓には飛行機を見張る必要から屋根が無く、風雪にはカッパや藁靴で耐えるしか有りませんでした。また、敵軍用機が印刷された冊子で種別を覚えるようにしていたそうですが、前述の大野さんによると、戦況が有利であった昭和１７年４月１８日、日本初空襲となったドーリットル空襲の際、１機が勝浦上空を低空で横切りましたが味方機と勘違いして手を振り見送ってしまったため、後に上層部から「しっかり見張れ！」と怒られたとのことです。なお、この日、東金方面の複数の監視哨は敵機進入を報じたものの、報告に半信半疑の軍による迎撃は不首尾に終わりました。防空監視哨は中央への敵動向の報告が本来業務ですが、数金さんが陸軍に入隊して監視哨を離れていた大戦末期には、勝浦でも空襲が激しくなり、監視員は半鐘を打ち鳴らして敵機の接近を街中に伝えた後に慌てて防空壕に飛び込む毎日となりました。

数金さんは 5 日に一度の防空監視哨勤務の他、週に 1～2 回、豊浜国民（小）学校で開かれていた青年学校や、週 3 回夜の 2 時間ほど、「漁村道場」という若い漁業者向けの研修施設にも通っていたとのことで、まだ１０代の数金さんは、生業の漁業、防空監視哨、青年学校、漁村道場と多忙な日々を送っていた様子が伺えます。